



## ゲームの神秘思想とノヴァーリス（二）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 正彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004616">https://doi.org/10.24729/00004616</a>

## ベーメの神秘思想とノヴァーリス (二)

福 島 正 彦

### 四 (承前)<sup>(1)</sup>

ドイツの思想家たちの内で、このゲルリッツの靴匠ベーメほどに愛された人はいない、と記され<sup>(2)</sup>、特にドイツ・ロマン派の詩人たちの内でノヴァーリスほどにベーメを愛した人はいない、と述べられている<sup>(3)</sup>。本稿は、ベーメを愛したこの詩人の視点が靴匠の自然神秘思想に向けられていること、ノヴァーリスの自然観がベーメの思想と著しい親近性をもっていることを、詩人のメルヒェン、詩歌、断片、「青い花」等にわたって、できるだけ詳しく明らかにすることを意図している<sup>(4)</sup>。

ノヴァーリスほどベーメを愛したロマン派詩人はいない、というH・ポルンカムは、そのベーメ論を締めくくる最後のパラグラフで、ベーメの「自然言語」に言及している<sup>(5)</sup>。確かにベーメは、人工的な記号を駆使し博識と技術を誇る学者たちではなく、別の偉大な師

すなわち「自然全体」に学び、すべての言葉の母である「自然の言葉」を質朴な心で聴きとろうとした。この点は前稿で指摘した通りである。同様のことをポルンカムの解説に従って言えば、自然の中にはたらく生きた神的力量は、「理性的思考の対象」ではなく、「最深い心によって」欲求され受け取られる「知恵の対象」である<sup>(6)</sup>。ベーメは、宇宙を実証的に探究し始めた当時の新しい自然科学に関して、技術的考察という点では無知に等しいことを認め、「すべての星の経過、場所、名称」や、星の年々の「台 Conjunction」や「衝 Gegenstein」などを記述するのが、「私の企て」ではない、そういうことは長年月を通じて、高い学識をもつ賢明な学者により、勤勉な実証的考察と「注意深い理解と計算」によって知られてきたものであって、自分はそのような研究をしたことはない、「私の企ては精神と意味とに従って記述する」ことであって、実証的な考察に従ってではない、と述べ、自分には学者たちの方法を変更したり、改善したりする意志は

なく、そのような能力もないこと、この方面に無学な自分は、実証的な研究や方法に関しては「そのあり場所にそのまま置いておくのである」と実に率直に語っている。<sup>(7)</sup>

ノヴァーリスの自然理解も、ベームと同様に、自然科学的方法によるものではなく、自然の中に繊細な「心 Gemüth, Herz」のはたらしきを感じし、自然の諸物の協和音「宇宙のシンフォニーの一和音 ein Accord aus des Weltalls Symphonie」を聴きとろうとするものであった。<sup>(8)</sup>ノヴァーリスの自然観とベームの神秘思想との関係を詳細に追求したエーデルハイマー<sup>(9)</sup>が指摘しているように、『ザイスの学徒』に描かれる学徒たちの「師」の目標と方法は、ベームとまったく同じものである。師の目標は「偉大な暗号の書 große Chifferschrift」として自然全体を捉え、この書を形成する「一つ一つの言葉として自然の諸形象を見るように弟子たちに教えることである。深遠な「秘文字 Reme」が弟子たちの眼前に繰り広げられるとき、「この文字をはっきりと示し理解できるようにする星」が、彼らの内に認識の光として、立ち昇るように配慮するのである。そして弟子たちに教える師の方法は、ベームと同様に、自然のさまざまな形象、響き、色彩を感じし、その精神的意味を表現しようとするものである。ノヴァーリスが『ティークに捧げる詩』においてベーム「ン」の名を挙げていることは前稿で述べたが、エーデルハイマーの解釈に従

えば、この詩の中にベームの特徴を示す語句が数多く見られ、それが同時にこの学徒の師の特徴を示しており、彼らにとって共に重要なことは、外界が我々に現わす「内的な喜び innere Lust」/生命の王国を探究するために不可欠な「謙讓に充ちた努力 voll Demut sich bemühen」/自然界の諸物による「自己教化 sich erbauen」である、と記されている。<sup>(10)</sup>

『ザイスの学徒』の「師」とベームとの共通性を示すものとして、エーデルハイマーは更に、この師の次の言葉を挙げている。「自然の告知者であることは美しい神聖な職務である」「自然に対して心底からの憧れを感じる者、自然の中に一切を求め、いわば自然の神秘的な営みの多感な道具である者は、崇敬と信仰をもって自然について語り、その話には真の福音、真の靈感を告げる不思議な模倣し難い透徹性と緊密性がある人のみを、自己の師として、自然の真の友として認めるだろう」(Lehr. S. 107)。ここで「師」が語るように、ノヴァーリス自身も自然に対して心底から憧れを感じ、自然全体を、謙虚な心で、あるがままに理解し、それがかなでる美しい調べを聴きとろうとしたのである。ノヴァーリスにとって、自然の美しいシンフォニーを聴くことができる者は、自然を鋭いメスで解剖し冷たく分析する自然科学者ではなく、詩人であり、真正の自然理解者は詩人なのであった。「詩という芸術」が、「真に自然を友とする者」

の最愛の表現方法となり、「自然の靈 *Naturgeist*」は、詩の内に、もつとも明らかに現われたのである。真正の詩を読んだり聴いたりするとき、「自然の内的知性 *ein innerer Verstand*」が活動し、あたかも「天上的身体 *der himmlische Leib*」であるかのように、漂うのが感じられる。自然は詩人によって一段と「生気を吹き込まれ *beseelt*」、最も神々しい生き生きとした着想を聴かせてくれるのであり、従つて、「自然の心 *ihre Gemüth*」を正しく知ろうとする者は、自然を歌う詩人たちの仲間にならなければならない。そこにおいて自然は開かれ、「自然の妙なる心 *ihre wundersames Herz*」が注ぎ出るのである。(Lehrl. S. 84.)。

人間は自然に対して実に捉え難いほどのさまざまな関係を結んでいる、とノヴァーリスはいふ (Lehrl. S. 85)。関係のしかたの相違に応じて、自然は異なる容姿を見せるのである。例えば、子供に対しては「子供っぽく」あらわれて、その幼なごころに従い、神に対しては「神々しく」あらわれて、神の崇高な精神に響きをあわせる。人間の内面には、深い中心から「周囲に広がってゆこうとする *stetig umgreifend*」傾向があるが、この傾向は、自然の側からいえば、「自然の引力 *ein Anziehen der Natur*」であり、人間と自然との「共感 *Sympathie*」の発現である。ただ或る者は、この遙かな青い形姿の背後に、故郷や、若き日の恋人や、両親と兄弟姉妹や、古

き友や、なつかしい過去を求め、また他の者は、彼方に自分のまだ知らない栄光が待つていて、その背後に生命に充ちた未来がかくれていると信じ、新しい世界に渴望の手をさし伸べる。このように、自然との多様な関係から生じる自然観が「最も敬虔な宗教に *mit andächtigsten Religion*」変わる場合があり、すでに純朴な民族の間にも、自然が「神性の顔 *Anrutz einer Gottheit*」であると見えた厳粛な心情の人々がいた。自然が「静かな不思議に充ちた神殿 *ein stiller, wundervoller Tempel*」に思われる人々もいた。(Lehrl. S. 85f.)。

人間が自然と結ぶさまざまな関係の一つが詩人の見方である。ノヴァーリスによれば、詩人の内部において、人間性は最もおろかとなり、最も完全な溶解状態となつて存在し、従つて、自然から受けるすべての印象が、鏡のような澄明さと可動性によつて、その無限なる変化のままに純粹に移入されている。自然の心を純粹にするがままに感知する詩人たちは、あらゆるものを自然の中に見出す。彼らに対してのみ自然の心はまだ親しみもっているものであり、彼らは自然との交わりにおいて、かつての純朴な「黄金時代のあらゆる幸福」を求めることができ、それを感得することができる。彼らにとつて自然は「一つの無限な心のあらゆる変化 *alle Abwechslungen eines unendlichen Gemüths*」をさなえている、といふのである。(Lehrl. S. 99)。

自然科学者の見方も、人間と自然との一つのかかわり方を示している。しかし、それは詩人の見方とはまったく異なったものである。それは、自然の「心」のあらゆる変化を、その多様性に従い、あるがままに感知して表現しようとするのでなく、技術と計算を駆使し、自然を一定の法則のもとに把握して、自然を征服し人間の利益のために役立てようとするのである。このために彼らは自然を切り刻み、測定と実験を繰り返して自然の構造を分解している。こうして「彼らの手のもとであの親しい自然は死んでしまつて、ただびくびくとふるえる死骸が残されたにすぎない」(Lehr. S. 84)。従つて、自然そのものの鮮やかな色彩、さまざまのすばらしい形象、美しい調べ、このありのままの生きた実在「自然の心」を感知できる者は、科学者よりもむしろ詩人である。科学者は、空が水面に映えるのを物理的反映として説明する。しかし、詩人のファンタジーから見れば、空が水面に映えるのは、単なる反映ではなく、「やさしい睦み合い eine zarte Befundung」[友愛のしるし ein Zeichen der Nachbarschaft]なのとある (Lehr. S. 195)。

自然の諸物の和合を切断し、自然を無際限に解剖し続けて、その内的ハーモニーを破壊している者たちへの強い抗議の声を、ノヴァーリスは次のように詩的に表現している。「ああ、人間が」と彼ら「自然諸物」が言った。「自然の内面の音楽をききとり、外面の調和に対

するセンスをもつていたらなあ！　ところが人間は、われわれが互いに連関し合つており、誰も他の者なしには存在できないということとを、ほとんど知らないのだ。何でもそのまましておくことができず、暴君のようにわれわれを引き離し、いたずらにかきまわしてはまったく混乱させてしまふ。彼らがいみじくもそう呼んでいるかつての黄金時代のように、彼がわれわれと親しくまじわり、われわれの大同盟に加わるなら、どんなに人間は幸福になれることだろうに。あの頃は、われわれが彼を理解したように、人間もわれわれを理解した。ところが神になろうという願いが、彼をわれわれから引き離し、われわれの知りも予感もできないものを探し求めて、それ以来もはやわれわれに声を合わせたり、動きを共にすることができなくなっているのだ。」(Lehr. S. 95f)。ノヴァーリスが詩的に表現しているこの訴えは、科学と技術の力を過信して、これによつてあたかも全知全能の神たらんと欲した人間たちの無謀な自然破壊に対する痛ましい抗議の声である。詩人はこのように自然を破壊し、不遜にも神になろうと欲するのではない。逆に、詩人はこの自然の諸物の痛ましい訴えに耳を傾け、自然全体のかもし出す「内面の音楽」と「外面の調和」を感じ、彼らの相互の連関と和睦の輪を認め、その内奥に神のはたらきを感じすることを願うのである。

ペーメが自然全体を自己の「師」と見なしていることは、既述し

た通りである。彼は自然の諸物を技術や計算によって分析的に考察するのでなく(そういう計算は学者たちにまかせると言い、また自分は愚直な男であつて、高度の技術や研究には無経験である、と言ふ Theos. Sendbr. S. 462) '自然全体を「精神と意味」に従つて述べようとするのであり (Mr. S. 17) 'あたかも「七つの車輪をもつた一つの環 ein Rad mit sieben Rädern」のように相互に関連した諸力が「神性」において統一されてゐる、と説くのである (Ibid. 270)。自然の内奥にはたらく神性は、「溶解することのできない永遠の紐帯 ein ewig Band, das nicht zergehen kann」 (Menschw. S. 263) である。それは永遠に自らを生み、最初のもは常にまた最後のものであり、最後のものは再び最初のものなのである。ベーメは次のように記している、「神の七つの霊すべては相互の中に生まれる。一つのものが常に他のものを生み、いかなるものも最初のものでなく、またいかなるものも最後のものではない。なぜなら、最初のものが第二のもの、第三のもの、第四のものを、最後のものまで生むと同様に、最後のものが最初のもを生むのであるから」 (Mr. S. 92)。「いずれの霊もその他の霊の外には存在せず、それらすべて七つの霊を互いに生み、その一つがなければ、ほかのものもまたないであろう」 (Mr. S. 106)。

ここでベーメが「七つの霊」と言うのは、自然の内にはたらく動

的作用的な「運動性」「湧出」「駆馳」の力としての「七つの Quantität」 (Mr. S. 24) を指している。前稿で述べたように、ベーメは万物を成り立たせる根源的諸力を七つに区分しているが、これはボルンカムその他の研究者が指摘するように<sup>(11)</sup>、ユダヤ神秘思想、カバラ Kabbalah の教説を取り入れたものである。ボルンカムによれば、ベーメが採用する三図式は新プラトン主義、カバラの数の象徴主義、パルケルスの錬金術であるが、その際ベーメにとって重要なのは、抽象的数式や物質的金属ではなく、それらの象徴を通して感知される「生命事象」を直観化することであつた、と言われる。<sup>(12)</sup>ここで我々にとつて肝要なのは、特定の数ではなく、根源的諸力の相互作用を把握することである。

## 五

ノヴァーリスにとつてもベーメにとつても、自然全体は一つの生きた生命であり、自然の諸物は相互に連関し、はたらき合つてゐるのである。そして生命である限り、それは人間と同じように「心」と「言葉」をもち内奥に「神性」を宿している、と考えられている。ノヴァーリスは「ザイスの弟子たち」の一人に、「自然全体が、われわれが人間と名付ける高次のすばらしい存在の一人一人の状態を、顔や身振りや脈搏や色つやのように、そのままにあらわしてはいな

いだらうか。」と語らせている (Lehrl. S. 100)。ここで、自然全体が、人間の身体の状態に、顔面や手足の動作や心臓の動きなどに、比せられているが、ペーメも同じように、自然全体と人間の身体とをパラレルに捉えて、次のように記している。「一人の人間の身体の内部あるいは空洞は星と地の間の深みであり、且つこの深みを意味している。身体全体があらゆるものと共に天と地を意味している。肉は地を意味し、そしてまた地によっている。血は水を意味し、そしてまた水によっている。息は空気を意味し、そして空気でもある。」 (Mt. S. 28)。ペーメはこれに続けて、気管を空気と熱と火と水との作用に、血管を星の通路に、腸を星の作用に、心臓を火と熱に、肝臓を水に、肺を地に、足を遠近に、手を神の全能に、頭を天に比している (ibid.)。

ペーメと同様に、ノヴァーリスが人間の身体と自然との対応関係を説いているところをもう一箇所挙げておきたい。「われわれに触れてくるものの総体が、自然と名づけられる。従って、自然は、われわれが感官と名づけるわれわれの身体の諸部分と直接の関係をもっている。われわれの身体の知られざる神秘な諸関係が、自然の知られざる神秘な諸関係を推測させるのである。こうして自然は、われわれの身体がわれわれを導き入れるかの不思議な共同体であり、このものをわれわれは身体の構造と能力とにに応じて知るようになるの

である。」 (Lehrl. S. 97)。

自然を真に認識するためには、我々は自然を人間と等しい身体のように見なし、自然の諸物を心と言葉をもった人格的存在のように想って、これと親密に和合、共感しなければならぬ。ノヴァーリスは、この真正な自然の友となる本質的な諸条件として、「自然との永い絶えざる交際」「自由で巧みな観察」「かすかな目くばせや動きへの注意深さ」「内面的な詩人生活」「錬磨された感覚」「神を畏敬する単純な心」などを挙げ (Lehrl. S. 87)、自然との人格的な和合体験を次のように美しく表現している。

「私が話しかけると、まさに岩は一人の独特の〈汝〉にならないだろうか。そして、私がある悲しく川波に見とれて、その滑らかな流れにさまざまの想いを忘れているとき、私は流れ以外の何であろうか。 Wird nicht der Fels ein eigenthümliches Du, eben wenn ich Ihn anrede? Und was bin ich anders, als der Strom, wenn ich wehnthig in seine Wellen hinschaue, und die Gedanken in seinem Gleiten verliere?」 (Lehrl. S. 100)。

岩は、詩人にとっては単なる無機的物体ではなく、心をこめて話しかけられる相手として、人格的な「汝」であり、川の流れが見とれている私にはかならず、「私」そのものである。ここに、自然の個物と自己との霊的な語り合いがあり、忘我的な一体感がある。

ペーメが「私はあらゆるものの中に、人間や動物だけでなく木や石や土や元素のような、理性なき被造物の中にも、悪と善、愛と怒りが存在するのを見出した」(Mr. S. 212)と述べているように、ノヴァーリスにとっても、岩石が内的生命、情緒を与えられているのである。

『青い花』の中で、巡礼が語っている、「祈禱が石の中にもある」のだと<sup>13</sup>。死別した愛しい人の面影を自然の中に求めて旅している悲しい巡礼の願いにこたえて、この石の中の祈りが、人間の祈りと呼応するのである。しかし、単に岩石や川の流れだけが我々と語り合うのではない。自然の全体が、詩的ファンタジーの中で、私に対する「汝」となりうるのであり、自己の内なる「神性」が、自然の内なるそれと合一するのである。「神を畏敬する単純な心」(ノヴァーリス、*Lehr. S. 87*)が自然の霊を感じし、「神によって照らされ点火される」霊(ペーメ、*Mr. S. 21*)が、自然の諸物の中に神の力を把握するのである。ペーメは、我々が熱烈なイマジネーションをばたらかせ、無垢な心と真摯な意志をもって、神的存在を捉えようとするならば、そのことが可能であると考え、次のように述べている。「神も天使もあらゆる瞬間に我々の眼前にあり、神性も我々の内にあるにもかかわらず、我々人間はこの世の我々の目をもってしては神も天使も見ることができないし、それらを捉えることができない。

しかし、我々は我々の想像力 *Imagination* と真剣な意志を神の中へ置くならば、神は我々に意志の中で現われ、心を充たすのであり、その時、我々は神を感じ、我々の目で見るのである」(3Pr. S. 25)。

この世の利害にとらわれた目によってでなく、執着のない広々した心とイマジネーションをもち、神を求める真剣な意志をもって、緑豊かな自然の中に出かけるならば、我々はそこに神の力を感じる事ができる、というのである。人工的な建造物がいかに壮麗であろうとも、「城壁の教会」の中には生ける神の力は見出されない。「多くの人々は二十年あるいは三十年と教会に行き、説教を聞き、聖餐にあづかり、免罪され、しかも他のものと同様にまったく悪魔の(むなしさの)動物なのである。動物が教会に行つて聖餐にあづかり、動物がそこからまた帰ってくるのである。」(WzC. S. 132)。「城壁の教会へ行き、空虚な息「から出る声」で耳をみたり、あるいは聖餐式に行き、可死的で色あせた地上の口だけで食べることが、私にとって何の役に立とうか。」(Ibid. S. 133)。

「城壁の教会」ではなく、緑の草原に出かけよ、とペーメは呼び掛けるのである。「神の知恵を探究して見出すことができる書物は、あなたが緑の花咲く草原へ出かけるときのほかにないであろう。そこであなたは神のすばらしい力を見たり *sehen*、嗅いだり *riechen*、味わったり *schmecken* するであろう」(3Pr. S. 62)。草花もまた、そ



れぞれがその固有の色、味、香りによって神性を表現しているのである。樹木の乳液は「明らかな神性」である (Mr. S. 2)。ペーメは、このような草花や樹木を、自然という大きな一つの書物に記される文字と見たて、次のように述べている。「文字はすべて一つの根の中にあり、この根は神の霊である。同様にさまざまな種類の花がすべて大地に立っており、すべてが互いに並んで成長する。どの花も色、香り、味をめぐって噛み合ったりしない。それらは、大地と太陽、雨と風、熱と冷を、それぞれ好きなように振る舞うにまかせ、しかもいずれの花もその本質と特性において成長する。」 (WzC. S. 123f)。

ノヴァーリスが、ペーメと同じように、『ザイスの学徒』の中で、自然をあたかも一冊の書物のように見なし、これを「暗号の書」「不思議の書」と記していることは、前稿の冒頭で述べた通りである。「青い花」の中では、老医師シルヴェスターの口を借りて、植物は「大地の直接の言葉」であり、いずれの若葉も、いずれのすばらしい花も、「押し出してくる神秘」である、と述べている。シルヴェスターによれば、我々がひとりであるとき、このような花が見出されると、周囲の一切のものが明るく照らされるかのように感じられる。草花が一面に咲いている大地には、「青い神秘に充ちた愛の絨毯」が敷かれており、春ごとにこの絨毯は新たにされ、その「不思議な文字」

は、これを愛する人へのみ解説されるのである。自然を愛する者は、日ごとにその新しい魅惑的な開示に気づくだろう、というのである。 (Lehr. S. 329)。

自然の諸物の内に神秘を感知し、そこに神性のはたらきを認めうるのは、我々自身の内なる同じはたらきによるとみえる点でも、ペーメとノヴァーリスは一致している。「あなたが哲学者にして自然探究者であろうと欲し、神の本質を自然の中に探求して、この一切のことがどのようにして創られたかを探求しようと欲するならば、神にその聖霊を求め、神がこれであなただけを照らすように願え」とペーメは言う (Mr. S. 27)。なぜなら、神の身体全体である自然を統べるのは神の聖霊であり、これを正しく把握する者は、それ自身我々の心を照らす同じ聖霊にほかならないからである。同様にノヴァーリスも「等しき心、等しき思いのものの間でしか、真の伝達は生じない」とい<sup>(1)</sup>、「ザイスの弟子たち」の一人に、「より純粋な世界」が、まさに「我々の内に、この泉の内に」あり (Lehr. S. 89)、この内奥の泉を見出した者が鋭い眼光をもって自然の中へ歩み入るとき、「すべては我々に熟知のものなのであって、そこでは何一つ知られないものはない、と語らせている (Ibid. S. 90)。

ペーメにとつても、ノヴァーリスにとつても、我々が憧れ探し求めているものは、遠く離れた彼方ではなく、我々に最も身近な所

に、いな、我々自身の内に存在するのである。ベーメは、「人間は自己を正しく知るならば、あらゆる被造物と共に創造者(神)をも知るのである」という(3Pr. S. 7)。神を「星のかなたの深みに」求めてはならない。神は「あなたの中の内に」求めなければならぬ(Epist. S. 25)。「あなたにとって天ほど近いものは何もない」、なぜなら「あなたの中に」、神の内在する聖なる「樂園 Paradies」が再生するからである(Ibid. S. 55)。ここでベーメのいう「樂園」とは、「神々しい天使のような歓喜」という人間の心の一つのはたらきを指すのであって、「この世界の場所の外にはなく nicht außer dem Loco dieser Welt」またこの世界の力と泉の外に存するのではない」と記されている。(Ibid. S. 71)。ベーメは更に、我々が自己を正しく知り、自己の内なる神の力によって正しく行動し生きようと欲するならば、知識はそこで我々が楽しむ活動 Spiel darin wir uns erfreuen」である」と述べている(WzC. S. 138)。

我々が探し求めている憧憬の対象が、遠い彼方ではなく、実は我々自身の身近にあることを、ノヴァーリスは美しいメルヒェンの形式で説いている。「ザイスの学徒」に含まれる「ヒアシンスとバラの花」の物語もその一つである。「万物の母であるヴェールをした乙女」を探し求めて、故郷を捨てて恋人「バラの花」とも別れた若者「ヒアシンス」が、多くの異郷を永年にわたってさまよい歩いた末にや

つと辿り着いた所は、天なる乙女の面前であった。「そこで彼は軽やかな輝くヴェールをかかげた。するとあのバラの花が彼の腕の中におれこんできたのである」(Lehr. S. 95)。万物の母なる乙女は、遠い異郷に求めるまでもなく、若者にもっとも身近な庭園の中にすでにいたのである。若者はただそのことに気づかなかつただけである。

草花の形象に託してノヴァーリスの描く若者が、見知らぬ異郷をさまよい多年の艱難の後に、親しい故国の乙女と再会したように、ベーメも天と樂園の中に立っている神的力量としての乙女、あるいは「美しい乙女としての神性」(3Pr. S. 119)を探し求めて辛苦を重ねた後に、故国の乙女と再会するのである。「私はいばらやあざみを通り抜け、(私にあびせられるあらゆる嘲笑と恥辱に耐えて)、かの地を目指して歩んで行こうと思う、私の魂がそこからさまよい出てきた私の故国、そこに私の最愛の乙女が住んでいる故国を再び見出すまで」(Ibid. 14)。「バラの花」に相当するベーメの象徴は「百合」である。「高貴なからしな粒があらゆる嵐の中で恥辱と嘲笑を受けながら百合 Lilie のように青々と萌え出るのである」(Theos. Sendr. S. 32)。「われわれはこの植物の花を開きたい」とベーメはいう(3Pr. S. 122)。そこには「物ではなくて、物の中に作用し、物を生育させ開花させる」チンクトゥール(Tinctur)がはたらき、それはほがら

かな「愛らしい歓喜」であり、「万物の生命にして心」だからである (ibid. S. 123)。チンクトゥールとは当時の錬金術用語でチンキ剤を指すが、ペーメでは「分けるもの、不純物から純粋なもの、または無雑なものもちぎたすもの」を意味しており、これは「神性の力と泉から来る」といわれ、従って、これの根拠は、霊において再生しないならば、博士であれ錬金術師であれ、誰にも知られない、とされている (ibid. S. 109)。その意味において、これはヴェールに覆われ、そこに到る道は果てしなく遠い。しかし、再生した霊によって正しく求める者にとっては、このヴェールは開かれ、「芳香を発する草花の内なる愛らしい甘さと柔和さ」が享受されるのであり、この意味において、「彼女への道はまったく近い」のである (ibid. S. 129)。

「彼女を正しく求める者、彼女があるがままの仕方、すなわち貪欲と快楽のためでなく乙女の心をもって求める者は、彼女に出会うのである」(3Pt. S. 123f)。「あなたがこのことを知ろうと欲するならば、あなたの心の内にある傲慢の小帽子を脱いで、楽園のバラ園を散策しなさい。そこにあなたは一本の草が生えているのを見出すだろう。それを食べるならば、あなたの目は開かれるだろう」(ibid. S. 68)。このようにペーメは、汚れた我欲、とりわけ傲慢さによってでなく、純粹無垢な謙讓の乙女の心をもって、正しく求める者の

みが、自然の内に「美しい乙女としての神性」を見出すことができるといっているのである。神的知恵としての「乙女ソフィア」は、我性を離脱した平静な魂に呼び掛け、「私の高貴な花婿よ、安心なさい。私は至高の愛をもって、あなたと婚約し、忠実な心をもってあなたと結ばれました。」と語る (WzC. S. 35)。ノヴァーリスにおいても、「天なる乙女」のヴェールをかかげうるのは、美的ファンタジーの世界に没入する詩人であるだけでなく、同時に無私の愛と謙讓の徳を具えた者でなければならぬ。真の「ザイスの学徒」の願いは、乙女のヴェールをかかげることであるが、「死すべき者は、あその碑銘にあるように、あのヴェールをかかげえない」のであり、従って、「われわれは不死なる者となるように努めなければならない」のである (Lehr. S. 82)。

## 六

夢に見た憧憬の対象を求めて旅に出た『青い花』の主人公が、途上で出会い深く愛するようになった乙女に語る言葉は、ノヴァーリスの不死観を示している、と思われる。「僕のマティルデ」と主人公ハインリッヒは乙女に呼びかけ、自分は今やっと、不死とは何を意味するかを感じているという。それは、彼女の現存であり、それと共にある自分の現存であり、互いの愛である。「マティルデ、僕たち

は互いに愛し合っているから、永遠なのである」と語っている (Oftend. S. 287f.)。このハインリッヒの愛は、決して地上的、肉体的な愛ではありえない。もしそうなら、いずれは枯れ落ちる哀れな花の運命にたとえて、マティルデが凋んだ唇、蒼ざめた頬、寄る年波への不安を訴えたとき、誠実なハインリッヒは、自分には美のほかなさについて言われていることが解らない、真に美しいものは決して凋むことがない、と答えることができなかつたであろう。ハインリッヒにとつて、マティルデが彼を惹きつけるもの、「永遠の欲求」を彼の内に呼び覚ましたものは、「この世のものではない」。それはマティルデの内面に輝いている「不思議な像」だったのである。(ibid. S. 288f.)。

ハインリッヒが限りなき憧憬の対象としてマティルデの内に見出した「不思議な像」とは、凋むことも壊れることもない乙女の清純な心である。彼自らが、等しく乙女に似た無垢な心をもつて、これと和合し共感するとき、その忘我的瞬間において、一切の無常の時間には意識の中で消失し、没時間としての永遠性が現出する。この刹那ハインリッヒはマティルデであり、マティルデはハインリッヒである。このような、いかなる変転に会つても変わることはない没時間的な霊的愛を離れて、どうして「不死なる者」となりえよう。胸中にある一切の汚れたもの、傲慢、貪欲、憎悪、その他あらゆる我

性に死滅し、純粹で善良な無私の愛に充ちた心に再生しないならば、一切は無常の時と共に変転し衰退し崩壊してゆくだろう。このように永遠性を没時間的とする見方は、ベーメにもある。「永遠の歓喜 ewige Freude」の内にある者について、ベーメは「そこではどのような悪しき思いも彼を動かすことはできないし、悩みも悲しみもなく、暑くも冷たくもなく、夜も知られず、昼も時間も存在せず、ただ一なる永遠の歓喜のみがある」と述べている (WZC. S. 5)。

「彼は乙女の甘さと柔しさを享受しようとし、もはや再び崩壊せず永遠に生きるために乙女の中で生きようと欲した」(3P. S. 140)。これはベーメの言葉であるが、あたかもノヴァーリスの描く主人公について語っているかのような印象を与える。ベーメにとつてもノヴァーリスにとつても、純粹無雑な澄明な心でもつて、人、物、自然を見、これと無私の愛によつて結合するとき、自己の心は当の人の内にとり物となり、自然の諸物となる。無垢の心で接するとき、万物の内には純粹な神性を感受することができるといふのである。ベーメは「純粹な神性」は到る所に、あらゆる場所や終端に現存しているといふ。「天使の世界はあなたが想いをはせるあらゆる終端にまで、土や石や岩の中にもまで達している」と述べている (3FL. S. 15)。もちろん、「悪魔の世界」「地獄」「憤怒」と表現される恐るべき暴虐の力の場も同時に存在すると考えられているが、これを克服する神性

の力が万物の内奥にはたらくと信じてるのである。ノヴァーリスは『断片』の中で、「神が人間となることができたのなら、神はまた、一石、樹、動物、元素にもなることができるだろう。そして、こういう仕方  
方で自然の中に絶えざる救済が存在するのである」と記している  
(Frag. S. 118)。

万物の中に、汚れない清らかな水のように純粹な神性がはたらし、自然の中に絶えざる浄化と「救済」がある、と考えられている。しかし、このような神秘主義的見解に対して、反論が出されるだろう。なぜなら、客観的対象として、我々の眼前に横たわる自然には、恐ろしい暴虐、激烈な闘争、痛ましい腐敗が含まれるからである。

このことは歴然とした否定しがたい事実である。ペーメもノヴァーリスも、この明白な事実を決して見落としてはいないし、それを片時も忘れていたのではない。「地上的母体の生む果実は脆弱性 *Zerbrechlichkeit* と果かなさの中にあつた」「自然の中には暴虐性 *Grimmigheit* がなければならぬ」とペーメは記している (3Pr. S. 97)。このペーメの「脆弱性」の観念と関連する『夜の讃歌』の中で<sup>(16)</sup>ノヴァーリスは「人間たちの広範な種族を、昔、ものいわぬ暴力をもって鉄の定めが支配していた」<sup>(16)</sup>「自然は孤独で生気を失っていた。鉄の鎖をもって自然をひからびた数と量が縛りつけた」(Hymn. S. 145)と記している。二人共、自然の暴虐性と脆弱性に誰よりも心を

痛めた。ペーメは当時猛威をふるつた悪疫ペストに愛児の一人(未っ子エアース)を失い、ノヴァーリスは愛するゾフィーを病魔に奪われたのである。しかし、このような悲しい体験があつたからこそ、かえつて二人は、自然の内奥にこの残酷で悲惨な事態を克服しうる神の力に憧れ、これによる自然の浄化を強く求めたのである。そして、この憧憬の中で、ほかならぬ自己自身の心の純化を通してのみ始めて、求めてやまぬ神的力量を、自己の内と自己を取り巻く自然の内、感知することができると、人間の側の愛に呼応してのみ、自然の内なる神性がはたらし、自然の浄化と再生が成り立つことができることに気づいたのである。ペーメは、神性は到る所にあるが、「愛の光と歓喜の国の発出する霊に従つてのみ、神と呼ばれる」と記し (Signa. Per. S. 431)、ノヴァーリスは「神哲学、神は愛である。愛こそ最高に実在的なもの—元底 *Urgrund* である」と記している (Fragm. S. 136)。

以上によつて、ペーメの神秘思想とノヴァーリスの自然観との親近性が、それぞれの著作に従つて具体的に明らかになつたであろう、と思う。前稿で指摘したように、ノヴァーリスは主著『青い花』に寄せた構想の中で、「花の会話、動物たち。ハインリッヒ・フォン・オフターディングンは花、動物、石、星となる。この書の結末で、ヤークプ・ペーメに従つて」という断片を遺している<sup>(17)</sup>。我々は、こ

の断片や書簡などを手がかりに、ノヴァーリスの諸作品を取り挙げ、これとヘーメの諸著書とを比較考察してきたが、結論として言えることは、両者の親近性は、自然に関する神秘主義的見解にもっとも顕著にあらわれている、ということである。

了

## 註

- (1) 本稿は、前稿「ヘーメの神秘思想とノヴァーリス(一)」(人文学論集第十一集所収)を受けている。前稿においては、ティルクに宛てた一八〇〇年二月二三付書簡の中で、ノヴァーリスが記しているヘーメ言及を手掛かりとし、ノヴァーリスとの関連性を探索できる点に絞って、ヘーメの神秘思想の概要を記述した。
- (2) Heinrich Bornkamm, *Das Jahrhundert der Reformation, Gestalten und Kräfte, Zweite, vermehrte Auflage*, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1965, S. 315.
- (3) H. Bornkamm, op. cit. S. 330.
- (4) この意図と後に述べる結論とは、かつて拙著『ヘーメ倫理思想の研究』(松籟社)の中で記したものと変わらせず、内容に多く重複があることをお断わりしておかねばならないが、本稿では、この結論を導出するために、ヘーメとノヴァーリスとの自
- 然観について、より詳細な比較考察を加えたのである。
- (5) H. Bornkamm, op. cit. S. 345.
- (6) H. Bornkamm, op. cit. S. 344.
- (7) J. Böhm, *Aurora oder Morgenröte im Aufgang*, S. 19, in: *Sämtliche Schriften*, Bd. I, Ausgabe von 1730 in elf Bänden neu hrsg. von Will-Erich Peuckert, Frommans Verlag, Stuttgart (1955-1961).
- なお、今後、ヘーメの著作と書簡からの引用は全てこの版により、本文中に次の略号を用いて記入する。
- Mr.: *Aurora oder Morgenröte im Aufgang*, Bd. 1.  
 3Pr.: *Beschreibung der drei Principien göttlichen Wesens*, Bd. 2.  
 3Fl.: *Vom dreifachen Leben des Menschen*, Bd. 3.  
 Menschsw.: *Von der Menschwerdung Jesu Christi*, Bd. 4.  
 WZC.: *Der Weg zu Christo*, Bd. 4.  
 Sign. Rer.: *De Signatura Rerum*, Bd. 5.  
 Theos. Sendbr.: *Theosofische Sendbriefe*, Bd. 9.  
 (8) Novalis, *Die Lehrlinge zu Saïs*, in: *Novalis Schriften* Bd. 1, hrsg. von P. Kluckhohn u. P. Samuel, Verlag W. Kohlhammer Stuttgart, S. 79. (以下、本文中の Lehl. の略号を用いて記

入する<sup>9)</sup>

- (9) Edger Edelheimer, Jakob Böhme und die Romantiker, Heidelberg, 1904.
- (10) E. Edelheimer, op. cit. S. 99.
- (11) H. Bornkamm, op. cit. S. 318. Gerhard Wehr, Jakob Böhme, Hamburg, 1971, S. 101.
- (12) H. Bornkamm, op. cit. S. 318.
- (13) Novalis, Heinrich von Ofterdingen, in: Novalis Schriften Bd. I, op. cit. S. 323. (以下、本文中の略字を用いて記入する<sup>9)</sup>)
- (14) Novalis, Fragmente, in: Die Lehrlinge zu Sais, Gedichte und Fragmente, Reclam, Stuttgart, S. 116. (以下、本文中の Fragm. の略字を用いて記入する<sup>9)</sup>)
- (15) エーザルンハイマーは『夜の讃歌』が Gebrechlichkeit の歌と名付けられた<sup>9)</sup> の理由とメーメの影響が確固とした<sup>9)</sup> の理由を指摘した<sup>9)</sup>。E. Edelheimer, op. cit. 87.
- (16) Novalis, Hymnen an die Nacht, in: Novalis Schriften Bd. I, op. cit. S. 141. (以下、本文中の Hymn. の略字を用いて記入する<sup>9)</sup>)
- (17) Novalis, Paraliromena zum "Heinrich von Ofterdingen", in: Novalis Schriften Bd. I, op. cit. S. 341.